

坪井正五郎の「コロボックル論」

—土曜会講演・長岡栄ノートより—

校長 鷹野光行

1. はじめに

お茶の水女子大学には、学術情報機構に属する組織の一つに附属図書館長を委員長とする大学資料委員会があって（以下、資料委員会、と略する）、附属校園を含めた学内に散在する大学資料⁽¹⁾の所在調査や悉皆的調査を予算的な裏付けが乏しい中で継続的にこなっている。附属校園に関しては幼稚園、高校、小学校の既知資料の調査、登録の作業をすでにおこなってきており、1915年の関東大震災により大きな痛手を被ってはいるものの、130年に及ぼうとする本学の歴史を物語る資料が数多く見出されてきている⁽²⁾。また、大学の創立120周年を期して桜蔭会館内に「お茶の水女子大学歴史資料室」が設けられたが、資料委員会はこの開設にも関わり、また合わせて大学の同窓会の会報である桜蔭会報を通じて資料の提供の呼びかけがなされた。桜蔭会には卒業生やそのご家族の方々からの寄贈資料も集まってきたと聞く。桜蔭会に寄せられた資料と資料委員会との関わりは今後きちんと協議していかなければならないが、今のところ別々に処理されてきている。

2004年10月に、たばこと塩の博物館の岩崎均史学芸員・鎮目良文学芸員とお茶の水女子大学大学院学生の和田華子さんを通じて、倉田陽子さんという方から、倉田さんのお母様である、女子高等師範学校の卒業生の長岡栄氏の残された資料を寄贈して下さる旨のお申し出があり、資料委員会ではこれをありがたく引き取らせていただいた。長岡栄氏は、1900（明治33）年に女子高等師範学校を卒業された後、盛岡市高等女学校に奉職された方で、寄贈された資料は女高師や盛岡の女学校時代のアルバム、小学校から女高師にいたる卒業証書、教員免許状や事例、そして夫君の長岡擴氏の辞令などともに女高師時代に受けた講義のノートやレポートなどがある。最後の一群の中にあつて筆者の目を引いたのが、表紙に

「明治二十九年十一月一日夜 土曜会

日本石器時代の工芸美術及び人類に就きて

坪井理学博士之講話

長岡 栄」

とある13ページにわたるノートである。「坪井理学博士」は人類学会の創設者の一人で、東京大学理学部人類学教室の初代主任教授、明治時代の中期から末期にかけて日本の考古学界をリードした存在であ

るとともに、「コロボックル論争」の一方の当事者としても有名な坪井正五郎である。筆者はこのノートの中でいわゆる「コロボックル論争」がどのように語られるのかに興味を持ちノートの解説を試みた⁽³⁾。以下、この時の講演の中身を紹介しながらここで展開された坪井の「コロボックル論」を見てみたい。

2. 坪井正五郎

講演の中身を見る前に、坪井正五郎について斎藤忠、寺田和夫の著作によって紹介しておきたい⁽⁴⁾。

坪井は1863（文久3）年、江戸両国に生まれた。1877（明治10）年、大森貝塚がE.S.モースによって発掘された年に東京大学予備門に入学した。1881（明治14）年、東京大学理学部生物学科に入学し動物学を専攻、1886（明治19）年には大学院に進学して人類学を専攻することとなる。翌々年理学部助手となり、1889（明治22）年から三年間主としてイギリスに留学するが、この頃を斎藤忠は、吉見百穴の調査をおこなったり、後述する人類学会を立ち上げたり、そしてやがてその中で「コロボックル論争」を展開する、「大学院の学生として、また理学部の助手として最も華やかな活動の時期ともなった。恐らく、彼の生涯を通じて、最も潑刺とした青春の気概にあふれた意義深い時期ではなかったろうか」と評している⁽⁵⁾。1892（明治25）年10月帰国後直ちに理科大学教授となり、人類学講座が設けられてからはこれの担当となった。1896（明治29）年には人類学会の会長となり、この年の11月1日に女子高等師範学校で講演を行っている。1913（大正2）年、ロシアのペテルスブルグでの万国学士院連合会に出席し、同地で客死した。

坪井の功績を三つあげておこう。第一は、人類学会の創設、であり、二つ目は考古学・人類学を一般に広く普及せしめる努力をしたこと、三つ目は石器時代の住民論争、いわゆる「コロボックル論争」の一方の旗頭として大いに論を張ったこと、その結果が二つ目の功績にもつながっている。

人類学会の創設は、1884（明治17）年10月12日で、白井光太郎、佐藤勇太郎、福家梅太郎、そして坪井の4人が発起人となり他に6人が賛同者となって10人で発会した。もともと坪井が大学予備門在学中に同級生らと共に知識の交換や演説の練習、及び懇親和楽の目的を持った「夜話会」が開かれていたのだが、そこでの話題が古物や遺跡などの話が盛んになってきて、しまいには古代の話をする会のようになってしまった。そこで同好の人たちとともに新たに人類学や古代学の話だけのできる会を設けよう、となってできたのが人類学会である。最初から人類学会という名だったのではなく、まずひらがなで「じんるいがくのとも」と呼び、大学への届け出上4回目は「人類学研究会」、5回目以降「人類学会」となった。この会はさらに1886（明治19）年から「東京人類学会」、1941（昭和16）年から日本人類学会となって現在に至る。当初から機関誌も作られており、「人類学会報告」「東京人類学会報告」「東京人類学会雑誌」などを経て現在の「人類学雑誌」となっている。この人類学会での講演や雑誌掲載の論文や報告をめぐって明治時代の考古学・人類学の盛んな活動が見られたのである。

坪井は依頼されると断ることなく多くの雑誌に分かり易い平易な文章で原稿を寄せたという。斎藤忠

の調べたところによると坪井の原稿が掲載されたのは「考古学雑誌」や「人類学雑誌」はいうまでもなく、「東洋学芸雑誌」や「理学協会雑誌」のような専門的雑誌のほか、「太陽」「風俗画報」「国民の友」「中学世界」「少年世界」「女子の友」「教師の友」「裁縫雑誌」などにも及んでいるという⁽⁶⁾。弥生土器の発見に触れた「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡あり」と題する一文⁽⁷⁾もこうした啓蒙活動の一つとしてとらえ得るし、東京人類学会雑誌には「貝塚は何で有るか」⁽⁸⁾という概説も書き、人類学教室による『日本石器時代人民遺物発見地名表』は坪井が主唱して作成されたものである。東京人類学雑誌誌上では読者の質問に答える、という欄も持っていた。

日本の石器時代の住民については、江戸時代から関心に上っていた。長崎にオランダの医師としてやってきたシーボルト (F. von Siebold) は帰国後著した著書『日本』の中で石器時代人はアイヌ人であった、としているし、その息子の小シーボルト (H. von Siebold) もこれを受け継いで土器の紋様の類似などからアイヌ説を補強している。大森貝塚を発掘したモースは、貝塚を作ったのはアイヌ人の居住以前に済んでいた人々と考え、プレアイヌ説を唱えた。坪井がコロボックル論を唱えるようになったきっかけとなったのは、渡瀬荘三郎が報告し人類学会報告の創刊号に掲載された「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」で、この中で紹介した遺跡がコロボックルのものだ、と主張した事による⁽⁹⁾。これに対して白井光太郎がM・S生の名で「コロボックル果タシテ北海道ニ住ミシヤ」と題して翌年の人類学会報告2-11に発表⁽¹⁰⁾し、北海道の竪穴や土器・石器はコロボックルではなくアイヌの祖先の用いたもの、と主張した。これに応じて坪井が「コロボックル北海道に住みしなるべし」⁽¹¹⁾と題して反論をおこない、二人の間には以下のようなやりとりが続いた。

白井 「コロボックル内地に住みしなるや」「東京人類学会報告」2-13 1887年

坪井 「コロボックル内地に住みしなるべし」「東京人類学会報告」2-14 1887年⁽¹²⁾

坪井がアイヌ説に対してコロボックル説を主張する根拠としたのは次のような点であった。

- ①アイヌは土器を作らず石器も使用しないこと
- ②アイヌは竪穴住居に住まないこと。
- ③日本各地の貝塚からアイヌの人骨は出土しないこと。
- ④アイヌ紋様と貝塚土器（註 坪井は縄紋土器をこう呼んでいた）の紋様は同じではない
- ⑤貝塚出土の土器や石器はコロボックルのものだとするアイヌの伝承。

坪井のコロボックル論と、ほとんど坪井以外のと言ってもいいくらいの反コロボックル論が互いにその根拠を示しながら坪井の死に至るまで続くのである。コロボックルとは、アイヌの伝説にでてくる小人で、もともと「落の葉の下の人」の意であるという。長岡栄による坪井の講演の記録を引用しよう。

「これら人類はアイヌと交易したるが、身体をみする事を嫌い、囲いの中にありて易へんとせる所物を戸外に出しおけば、アイヌは其処に至り相応の果を置き之を持ち帰るなり。然るにある時アイヌ人は強いて其の体を見しかば怒りて他に逃れたり。其争いのありしは今のとちにして十勝は沼にのみし高台を焼くの意あり。これ其逃る々に当たりかくいひしものなりとゆふ。その逃れたるところは

北の方にてアイノの言によれば今より三四代前、全くこの地を去りして即今を去る二百年ばかり前なり。之より千島に渡りそれよりアメリカのアラスカ、グリーンランド地方に移りし者の如し。」⁽¹³⁾

坪井のコロボックル説は坪井の死とともに消えていくのだが、コロボックル論争を通じて日本の考古学界では、アイヌ説・コロボックル説それぞれを補強するためにいくつもの新しい発見があり、また古代の遺物と民族学的資料とを比較することの重要性、遺物を通じて古代の風俗などを考察することの意義、を学び、何よりもこの論争を通じて日本全国に石器時代への関心を広めた、という意義ももたらしたのである。

3. 土曜会での講演

「日本石器時代の工芸美術及び人類に就きて」と題する坪井の講演は、まず「日本石器時代の美術及び工芸」と題してはじまり、ここでは「人類学の研究は第一に記録、第二古物遺跡」により、両者はどちらも必要ではあるが「往昔人智未開の時」について研究するには古物遺跡にもつばらよると述べ、古物遺跡はまた一度失われると二度と得られない、と考古学研究の宿命とも言える課題にも触れる。

「古物遺跡の種類」の項では具体例を挙げながら貝塚、土器、石器の三つについて説明をし、「古物遺跡の分布について」では「貝類堆積」「遺物包含層」「遺物散列」の三者をあげた。現在ではそれぞれ貝塚、遺物包含層、遺物散布地、とよぶものだろう。そして「我が国には日本人に先立ち一種の野蛮人の住せし形跡あり」として日本列島の先住民の存在を指摘する。この先住民は「石器土器と共に出つる人骨を見るに、吾人の先祖及びアイノ人種の骨格とは大いに異なるところ」があり、「数人のアイノ人に就きて聞くも、その先祖より以前他人種ありし事を伝え」るが、坪井自身が釧路で掘った竪穴住居からは土器や石器を得ているので、アイヌ人とは違って土器や石器をつくり竪穴住居に生活する人種がいたことを示す、とする。そして「その穴は円形又は楕円形にして蔭の葉をもって屋根を葺き」、アイヌ人はこの人種を所によって異なるがトイチセクル、トイチクル、コロボックル、クソロポックル、チセコッチャル等と呼ぶことを紹介した。

続いて「此等人種の風俗」と題し、衣服、髪、顔、遮光器⁽¹⁴⁾による「覆面」のこと⁽¹⁵⁾、また「氣候の厳冽なりし」こと、貝類を主とする食物ながら山国では土器石器と共に「骨の堆積するを見る」ことから「禽獸」を主な食物としていたこと、農業はなかったから「自然の穀物果実などを食せし」、穀物をつぶすのに臼のようなものを使っていたことを、同様の道具が「アメリカの内地にては今もかかる器にて果穀物をつぶす人種」がいるとして説明した。竪穴住居は釧路のみでも二三百見られるという。

坪井はこの講演の中で、先に紹介したようにコロボックルが千島、アラスカ、グリーンランドに移住していったという仮説を示したが、具体的にはエスキモーとの比較を試みている。「此等人種のあとを訪ぬるに大いにエスキモーに類似せり。しかもアイノ人種には異なる点多し」として「エスキモーは人形をつくるを好めるもアイノ人は之に反す」こと、「エスキモーは獸類の形をつくらねどもアイノ人は之を作る」こと、さらに「漁業の法も頗るエスキモーに類す」として樵塚貝塚⁽¹⁶⁾や西ヶ原貝塚⁽¹⁷⁾から

も出土した「浮き袋の口」と通称される遺物とエスキモーの同種の遺物との共通性を比較した。また「石器時代の住民は歯のあしかりしあと」のあることとエスキモーが「世界中最も歯のあしき人種」であることも引いて「日本石器時代の人類はエスキモーに類するものたり」との一応の結論を述べている。

講演はこのあたりで時間が迫ってきたのか、以後は簡単になり、石器は石ヒ（テングノメシカヒ と表記、以下同じ）、石錐（キリ）、石槍（ホコ）、石鏃（ヤノネ）、石斧（オノ）を図と共に紹介し、土器の紋様は散列模様・並列模様・連続模様の3つにわけて日本人、アイノ人、ヨーロッパ人の好みに対応させた。そして土器の中に貯えられた朱によって「当時又絵の具の如きものあり」という説明で終わっている。

この朱の説明にも注口土器のような図が添えられている。

4. おわりに

土曜会でのこの講演も、坪井の2番目に挙げた功績の一つになるのだろう。土曜会は、女子高等師範学校となる前の東京女子師範学校の時代から寄宿舎内で懇親のため開かれていたもので、毎月1回、教官を招待してもたれていた、という⁽¹⁸⁾。『お茶の水女子大学百年史』の記述には土曜会での「余興もしいだいに単調に流れ」とあるので、懇親の場としての意義が大きかったようであるが、このノートに見られるように、外部の人を招いての講演会もあったようである。また『東京女子高等師範学校六十年史』には明治26年2月に「本校生徒及び職員間の関係を親密ならしめようとの趣旨」で「如蘭会」という組織が作られ、そこでの「師弟懇親ヲ結ブ要」のひとつとして「生徒ハ土曜会ニ教員多数ヲ招キ教員ハ可成ソノ招キニ応ジテ出会スルコト」が挙げられていた⁽¹⁹⁾。ここでは土曜会は生徒の主催する会であることが想像される。だとすると坪井正五郎も生徒たちの間からここに招かれ講演をしたのだろうか。

人類学会報告などに載せられた坪井の文章は平易な口語体で書かれているものが多い。ところがこの長岡栄ノートは「～べからず」とか「～にあらず」「～の如し」など、文語調で書かれている。坪井の言葉を一言一句残らず筆記されたのだろうか、それとも長岡氏なりにまとめられたものなのだろうか。または筆記されたものを語尾など文語調に改めて清書したのもだろうか。このノートの文字は崩し字ではあっても書きなぐったようなものではないので、清書された可能性が強いのではないだろうか。

最後に、文字のない世界である考古学を学んできたはずの筆者には、長岡栄氏の崩し字の文を読むのには苦勞した。しかし「解説」には、荻原万紀子さん、奥田環さん、そして鷹野チツの皆さまにご教示をうけながらようやく読めたものであることを記し、深く感謝する次第です。

註

(1) 「お茶の水女子大学資料収集基準」（平成10年10月29日決定）では次のように定義している。

第2条 この基準において、「大学資料」とは、次の各号に掲げるものをいう。

- 一 附属校園を含む本学の歴史や女子高等教育の歴史に関する資料（大学史関係資料）
 - 二 研究教育活動の過程で生み出されてきた研究資料（学術資料）
 - 三 教授会議事録等を含む大学の運営に関する資料（大学行政文書）
- (2) 『お茶の水女子大学 大学資料目録1』2001年3月 お茶の水女子大学
 - (3) 本文では今日では使用しない用語も多数出てくるが、あえてノート中の表現をそのままに用いたこととお断りしておく。又「コロボックル」は「コロポックル」とも書かれ、長岡栄氏は後者の表記をしている。坪井がこのように発音したのであろうか。なお坪井の著作中には前者のような表記をしている。
 - (4) 斎藤忠『日本考古学選集2 坪井正五郎集 上』1971 築地書館
斎藤忠『日本考古学史』1974 吉川弘文館
寺田和夫『日本の人類学』1975 思索社
 - (5) 斎藤忠「学史上における坪井正五郎の業績」『日本考古学選集2 坪井正五郎集 上』1971
 - (6) 斎藤 1974 p.131
 - (7) 坪井正五郎「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡あり」東洋学芸雑誌6-91、1889
 - (8) 坪井正五郎「貝塚は何で有るか」東京人類学会雑誌3-29 1888
 - (9) 渡瀬正三郎「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」人類学会報告1-1 1886
 - (10) M・S生「コロボックル果タシテ北海道ニ住ミシヤ」人類学会報告2-11 1887
 - (11) 坪井正五郎「コロボックル北海道に住みしなるべし」東京人類学会報告2-12 1887
 - (12) 神風山人「コロボックル果タシテ内地ニ住ミシヤ」『東京人類学会報告』2-13 1887年
坪井正五郎「コロボックル内地に住みしなるべし」『東京人類学会報告』2-14 1887年
 - (13) 影響のない範囲で漢字をひらがなになおしたところがある。また「アイノ」はアイヌのことであるがこのように筆記されている。以下の引用文も同様。
 - (14) エスキモーなど極北民族の間で、雪や氷による反射光をさえぎるために用いられた横長のスリットのある木製あるいは革製の一種の雪眼鏡。縄紋晩期の東北地方の土偶は、遮光器をかけたような眼の表現から坪井正五郎以来遮光器土偶の名がある（『世界考古学事典』1972 平凡社 より抜粋）。
 - (15) ここではノートの欄外に遮光器をつけたとおぼしき顔が書かれている。坪井が黒板にでも書いたものを写したのだろうか。
 - (16) 茨城県稲敷郡江戸崎町にある縄紋時代後期の貝塚。霞ヶ浦の南側にあり、明治時代後半から発掘が行われている。
 - (17) 東京都北区西ヶ原にある縄紋時代後期の貝塚遺跡。1892年に坪井正五郎によって発掘された。
 - (18) 『お茶の水女子大学百年史』1984 p.90
 - (19) 『東京女子高等師範学校六十年史』1934 p.375

(2005年3月27日)